

《渡邊益男教授の退職を記念して》

渡邊先生とブルデュー旋風

——送る言葉にかえて——

中 田 重 厚

渡邊先生に最初にお会いした時から早や7年の歳月が流れた。時が経つのは早いものだ。当時社会学科では、社会福祉を専門に研究するスタッフを求めていた。日本社会学会のある一会員の方から福祉関係の研究者ですばらしい人がいるので会ってみませんかと言われてお会いしたのが最初である。ご本人の経歴や研究内容等について一通りお話をうかがった後で二つのことを話された。一つは今日の福祉についてであり、もう一つはブルデューについてである。

まず、社会福祉のことだが、先生はこんな話をされた。「ここ数年来、社会福祉についての考え方は大きく様変わりしているんですね。これまでは正常者の中に障害者の人たちを包摂（integrate）して同等に遇するということからインテグレーションということが言われていたけれども、今では、その考えがもっと進んで、両者の差異性すら無くしてすべてを包み込む（include）というインクルージョンという考えになってきているんですね。これはもう格段の進歩だと思います…」と眼を丸くして滔々と話される。実は、私は、福祉や障害児教育の現実や理論については全く無知だったので、このことは驚きであった。私が専門にしている労働の領域では、かつて男女同一賃金といわれていたものが、いまやコンパラブル・ワース、つまり男女の違いに関わりなく、あくまでも仕事の内

容が同一ならば同じに遇せられるとする考え方になってきている。ここ数十年の間の時代の変化を感じる。

昨年の暮れに本学科の社会福祉士受験資格のための講座開設記念シンポジウムが行なわれた。この時、外部から招かれた講師の一人に八王子のヒューマン・ケア協会代表の中西正司氏がいた。この時の中西さんの話は衝撃的で、福祉に関する私の固定観念は粉々に打ち砕かれてしまった。私の固定観念とは、障害者は正常者がお世話するべき相手であり、障害者とは、お世話されるべき対象であるというものだ。しかし、私の予想だにしなかったことが現実に行なわれていたのである。中西さんご自身は障害者である。にもかかわらず、その方が中心になって組織を動かしている。障害者自身がここでは障害者のお世話をする形である。それどころか正常者である職員の方々の世話（manage）をもしている。中西さんの講演題目は「障害者主権の社会福祉」だったと記憶しているが、講演を聞き終って思わず唖ってしまった。これはもはや、インクルージョンとかインテグレーションという次元の問題ではない。それらを超越して自主管理（self-management）という段階に大きく飛躍しているのではないかと考えた。

渡邊先生がその時話をされたもう一つのこと

はつぎのことである。先生は別れ際にこう言った——ブルデューはおもしろいですね——と。7年前の当時はすでにブルデューの本が何冊か翻訳されていた。そこで何冊か買い揃えて読んでみると、これまで私が社会学に対して抱いていたいくつかの疑問が氷解していくのを覚えた。先生がこの大学のスタッフとなってからの7年間は、ブルデュー旋風が吹き荒れた7年間だったと言えよう。いや、さわやかな風が吹き込んできたと言うべきか。渡邊先生の行くところにはどこでも“再帰的近代化”とか“ハビトゥス”などの用語が飛びかっていたし、私たち学科のスタッフはそれに否が応でも付き合わされざるを得なかった。先生は、学部のゼミでも大学院でもブルデュー中心に行っていたようである。大学院の講義のタイトルが「反省的・再帰的社会学」となっていたから、これはもう相当なものである。

今回私が“渡邊先生を送る言葉”を書くことになり、この際ブルデューを少しでもと手にした本が「ピエール・ブルデュー 1930-2002」（藤原書店）という本であった。これは彼の追悼集の形をとったものである。この本の前半は、加藤晴久氏の質問にブルデューが答える形で編集されている。そして、後半部分にはブルデューのいくつかの重要な論文が収録されている。おまけに、“アメリカという例外はない”という興味ある政治批評までが掲載されている。

ブルデューは、人民（people）の立場から社会学を科学たらしめんと努めた研究者であった。彼は理論家であると同時に実践家であった。people という用語は被支配層という意味で用いられる歴史的概念であり、民衆とか庶民とか市民という概念とも異なっている。彼はいつも被支配者、被抑圧者である人々の眼でものを考え、行動してきたのだと思う。彼は、フランスの中の失業者を支援する組織をつくり、彼らと

共に闘ってきたし（「市場独裁主義批判」の中の失業に関する論文）、またジャーナリズムのあり方を研究し、それを正すためのジャーナリストと研究者のグループを組織していた（本書および「メディア批判」）。今回、私が本書「ピエール・ブルデュー」を読み感銘を受けたことの一つは、彼がその仲間の研究者たちと一緒に行った面接調査とその社会学的分析「世界の悲惨」についてである。この面接調査が行われた動機とその背景について、ブルデューはつぎのように説明している。すなわち、インタヴューの対象になった人たちは、ホームレス、浮浪者、失業者などのいわゆる「極貧層」に限らず、生活に恵まれているごく普通の人たちで職場の労使関係や人間関係、また仕事上のことなどで様々な悩みを抱えている人々であり、それらの人々の声に耳を傾けることだった。そして、この本はフランスのミッテラン社会党政権の末期に企画されたものであり、「その狙いの一つは、人民の意思を表現しているはずの体制がいかに人民の言うことを聞いていないかを示すことでした」（本書13頁）と彼は言っている。多くの市民の代弁者たるべき政治家や労組幹部の者たちが市民一人一人の声に耳を傾けていない。したがって「世界の悲惨」は、社会学的調査という形で行なった政治批判の書というものがもう一つの顔であろう。そして、インタヴューの対象となった人やこの本の読者にとっては一種の治療的效果を伴うものであったとブルデューは言っている。インタヴューの対象者にとっての治療的效果について、彼はあるソーシャル・ワーカーのことを引合いに出している。その人は、北フランスの貧困地帯で地区再生プロジェクトの主任をしている女性であるが、計画を実施する手段がほとんどない。自分のやっていることは、せいぜい人々の苦しみをなだめ、眠らせることでしかないのではないかと彼女は悩む——その

彼女が面接者と語ることが本人にとって治療的効果を持つことになったのだとブルデューは言っている。

対談者の加藤氏は、最近福祉関係の仕事にたずさわっている人たちが出している雑誌の俳句・川柳の定型詩欄で自分たちが世話をしている貧困者や障害者たちを嘲笑するような作品を発表していたことを上げ、ブルデューに意見を求めている。これに対して、ブルデューは、それは大変興味深いことですねと言い、この人たちは、蔑視すべきとされている人たちの世話をしているがゆえにいささか蔑視されている人たちなのだと答えている。このブルデューの言を更に敷衍すると、自分たちが世話をしている相手のことをクソミソに言うことによって、世間からはいささか蔑視されている仕事を行なっている自分たち自身をもあざ笑うといういわば自虐的な意識がそこに込められている、二重写しの精神構造になっているのではないかと考えた。

この本を読んで特に私が学んだことの一つは、ブルデューたちの行なった調査が、通常行われているいわゆる実証主義的調査と違って「反省的 (réflectivité)」と呼ばれるものであることだ。この反省的ということの意味は、調査の客観性を保証するためには、調査もしくは観察する者の視点を客観化 (対象化) する、つまり反省することである。ブルデューは、そのことをつぎのように説明している。「……調査者の問いかけ自体を批判するために大きな努力がなされている (の) ……です。実証主義的調査はこの努力をいっさいしません。客観性と言いますが、客観性とは主観のゆがみを批判しなければならないのです。質問する者が受ける者の社会的立場に立ったら、どのように言うだろうかを自省しなければならないわけです」(本書20頁)。これまでの調査論では以上のような観点が欠落していたと思う。

この本の次の対談では、ハビトウス (habitus) ということが上げられている。ハビトウスとかプラティック (platique) という概念は、現象学やエスノメソドロジーなどの主観主義的社会学と構造主義など客観主義的社会学の両者を橋渡しする、もしくは両者を乗り越える理論的武器としてブルデューが案出した特有の概念であった。今後これらの概念は益々重要性を持ってくるものと思う。ブルデュー特有の社会学用語としてこの本の後半に出てくる“界” (chemp) という概念がある。

私が今回ブルデューを通じて知りえたもう一つのことについて是非とも言及しておきたい。それは、ブルデューの学問的姿勢、思想についてである。これについては、藤原書店出版の「構造と実践」の中で書かれている。あなたはマルキストであるかと問われて、ブルデューはこう答えている。「人は一人の思想家に反対して、当の思想家と共に考えることができる……例えば、私が界の概念を構築したのは、ウェーバーが行なった、僧侶、予言者、呪術師の間の関係の分析について熟考することによってであり、つまり、ウェーバーに反対しつつ、同時にウェーバーと共に考えたわけです」。これと同じことが、マルクスについてもデュルケムについても言えることである。「…私は、マルクスに反対してマルクスと共に考えることもできるし、デュルケムに反対してデュルケムと共に考えることもできる……あるいは……ウェーバーに反対してマルクスおよびデュルケムと共に、あるいはその逆の形で考えることも可能だと思います。科学はこうやって進んでいくのです。」「…というわけで、マルクス主義かどうかというものは宗教的二者択一であって、いささかも科学的なものではありません……」(同書82頁)ときっぱりと言う。ブルデューは、社会学を精緻化するために、これまでのあらゆる社会学理

論とその先駆たるマルクス、ウェーバー、デュルケム、ジンメルに学び、それを自らのものにしていった。ただし、ブルデューが最も依拠する理論はやはりマルクスであった。それは、何よりも、マルクスには、個々人の置かれた目に見えない関係構造として社会関係を把握する視点があるが、ウェーバーやアメリカの相互作用理論の伝統にはこれが欠落していることからである。この点で、構造を個人の単なる相互作用と観る皮相な観方をとるウェーバーから私ははっきりと袂を分かったのだとブルデューは言っている（「ピエール・ブルデュー超領域の人間学」藤原書店刊180頁）。

さて、渡邊先生について書くつもりが、いつの間にかブルデュー論になってしまった。昨年10月の学内でのシンポジウムの際の先生の演題は「〈福祉の心〉そして福祉の理論と実践」であった。福祉の心を福祉社会学の中心に据えたという渡邊先生の心持ちが十分伝わってくる。先生はこれまで、福祉の現場を多く渡り歩き、

障害者の人たちや子どもたち、お年寄の人たちと親しくし、その方々から多くのことを学んできた。

学問と人生とパイプをこよなく愛し、とりわけ、社会的に恵まれない人たちを力づけ、励ましてきた先生。もちろん、研究室の同僚や学生たち一人一人を励まし、また時にはお互いに冗談を言い合ってその場をなごましてくれた。これは渡邊先生の、誰に対しても同格にわたり合うことのできる根っからの民主主義的な精神に由来するものだと私は考える。権威主義や権力主義を何よりも憎み、それに対抗した。これは、先生の生まれ育った時代の精神からくるものであり、同時にそのお人柄だと思う。渡邊先生からこの7年間に多くのことを学ばせていただいた。今後の更なる発展とご健康を願ってペンを置きたい（2003. 1. 11）。

（なかた しげあつ、本学科教授）